

# 頼和小説における〈日本警察〉

——「秤」を中心にして——

謝 建 明

## 一、はじめに

いままでは台湾文学史において近代文学の出発点といえ、だれもが当然のように頼和から始まるとするのが普通であった。頼和は「台湾新文学の父」と称されている。一九二六年に、彼は処女作「闘闘熱」を発表した。「これはほぼ台湾近代文学のスタートラインと考えてよい」という指摘がある。確かに、二十年代に、文言文に替わって白話文による新しい文学作品が生まれた。その新文学の代表とみなされているのが頼和で、日本植民地統治下であつたにもかかわらず、生涯日本語による創作はせずに白話文に終始した。

日本植民地時代における台湾人に対する政治弾圧は、植民地を統治する道の一つである警察から直接来たのである。台湾で植民地政策を実施する警察は、台湾人の生死に決定的な権力を持っている。日本が台湾を占領した早期、警察（巡查）はすべて日本人が担当したため、台湾の人々に「査大人」と皮肉的に呼ばれてい

た。一八九九年以降、台湾総督府は、台湾人を「巡查補」として採用しはじめた。これらの人々は、台湾の人々によって「補大人」と蔑称されていた。植民地の日本統治者は、巡查、巡查補という厳密的、かつ残酷的な制度を通じて、台湾人を統治する権力を強く握っていた。

頼和の多くの文学作品は、いつもこの警察（巡查）にまつわる主題をめぐって展開しているのである。本論では、彼の代表作の一つである「秤」を中心に、この小説の中に現れる植民地制度の残酷さとその罪を論じてみることにする。

## 二、頼和とその文学背景

頼和（一八八四—一九四三）は、本名は頼河、後に頼和と改める。彰化市の「百姓」の家に生まれた。祖父は大道芸人であつたため、家計は窮乏していた。頼和は幼少の頃、漢学塾で学び、日本語で授業をする公学校にも通っていた。一九一七年、台北医学

校卒業後、彼は大陸に渡り、廈門（アモイ）の博學病院に勤務したことがあるが、まもなく台湾に戻り、以後、彰化で開業医として一生を送った。

廈門に勤務したころ、頼和は「五四運動」の影響を受け、民族の自決がいかに重要かを深く感じ、とくに、民衆の教育を推進する重要性をもよく理解した。文学がある階層の独占するものでなく、平民大衆のためであると彼は考え、医者として生活を送りながら、文学創作を続けていたのである。

頼和は彰化でよく知られ、「詩医」といわれている。彼は自分の疲れを気にせず患者を診ていたが、一生、素朴な生活を送っていた。地方の人々から「和仔先」と呼ばれ、非常に尊敬を受けていた。彼は世を去つてからも、人々に神様と祭られたことがある。

葉石涛氏は『台湾新文学誕生の背景』という書の中で、「台湾の農民の苦難を描写し、台湾人と日本人の闘争にも深い考えを持ち、彼は非常に強い民族意識を持つている」ものである、と頼和のことを高く評価している。この「非常に強い民族意識」は、彼が生涯に守り続けた二つのことから考えられる。一つは、唐の服を着ていて、一度も和服を着たことはない。もう一つは、漢字で執筆していたこと。とりあえず文言文で執筆し、後にそれを白話に書き直したことはあるが、日本語で小説を書いたことはない。

頼和は平民作家として台湾文壇に登場した。一九二一年、彼は台湾文化協会に入り、理事に選ばれた。この間、彼は「大衆に奉仕する事業こそ、正当な事業であり、光栄な事業である」と痛感

し、熱心に社会活動を行つてきた。

台湾新文学運動の中で、頼和はこの運動と社会改革運動との結びつきに努め、新文学の陣営に立ちながら、張我軍の文学主張を支持していた。さらに、彼は「日本紙『新旧文学の比較』を読む」、「台湾民報の問いに答えて」等の文章を発表し、新文学運動の重要性を強調し、自分の文学理論を提出した。彼によれば、新文学は「時代の要求」に応えるものであり、「民衆を対象に」している。新文学は「社会の縮図」として、「舌先と筆先との結びつき」という形式で、解決しなければならない「現社会の問題を、もっとも重要な問題を」を反映するものである。新文学の特徴は、活力、普遍性を持ち、人を感動させるということなどが挙げられる。新文学界では台湾の特色ある文学作品を多く作ろうと頼和は唱え、それによつて、自から救う道を民衆に教えると考えている。一九二五年から相次ぎ発表された白話散文『無題』、自由体詩集『覚悟下の犠牲』、一九二六年に世に出た『鬪闘熱』、『秤』などの短編小説は、圧迫された台湾人の声を代言し、直接筆槍を植民地支配と封建主義に向け、内容的にも形式的にも大きな革新性を持つている、と考えられる。特に「夕陽」という詩では、日本による圧政を示した<sup>(3)</sup>。

日漸西斜色漸昏

日漸西に斜き色漸く昏し

発威赫赫意何存

威を発すること赫々として意何くにかある

人間苦熱無多久

人間の苦熱多久しく無からん

一九二七年、台湾文化協会が分裂した。頼和は文学創作を続ける一方、「台湾民報」、「台湾新文学」などの新聞紙の編集にも携わっていた。彼は始終、自分の方向を迷わず、深く現状を思考して探究して行ったのである。一九三〇年、「台湾民報」創立十周年を迎えるころ、彼は「我々の喇叭手が民衆を激励する行進曲を奏でるのを希望して」という文章を寄せ、社会改造運動を鼓吹していた。その中で、彼は「新聞は民衆の先鋒であり、社会改造運動の喇叭手」であると論じ、文学者が「冷静に観察する」ことを通じて、「発表された作品は検閲を通過させ、我々の意志を抹殺してはならない」という「巧み」な方法で、文芸民衆化の運動を行うべきであると言っている。

この文章に言及された新聞のことからは、頼和の文学観がうかがえる。彼は多くの作品を発表し、植民地政策が台湾人にもたらした傷害を反映し、その政策の妥協者に批判を加え、民衆の偉大な精神を賛美している。しかも、芸術表現において、彼はもつとも民衆性と郷土性を重んじるようになった。

一九三七年、中日戦争が勃発し、すべての中国語新聞社が取り締まられ、頼和はしかたなく筆を休ませ、彼の病院も半年ぐらい閉められた。一九四一年、太平洋戦争が起こり、彼はまた「思想問題」の理由で投獄された。心臓病の悪化で約一ヶ月後に釈放され、一九四三年一月三十一日に五九歳の人生を閉じた。

頼和の文学作品は未完成のものを含めて短編小説十八、自由詩十一、雑文十数篇、歌謡数篇、漢詩およそ二百首がある。『頼和先生全集』は一九七九年に台湾明潭出版社から出版された。

日本領台湾後、植民地の作家にとって、「言語」という厚い壁があった。一八九五年以後一九四五年まで、台湾はまぎれもなく日本の植民地であったし、日本語教育の推進された土地であった。当時、「本島人」は、私的にはなお日常自らの言葉（猪南話、客家話など）を用いはしたものの、公的には「国語」（日本語）をつかわなければならなかった。日本が台湾でとった言語政策は原住民に日本語を学ばせることを基本方針とした。一八九五年（明治二八）五月に台湾総督府仮条例が制定され、本格的に本島人子弟への日本語教育を開始した。翌年、学務部長に着任する伊沢修二が「国語伝習所」、「国語学校」を設置、その他台湾適用日本語教科書の開発や台湾語のカタカナによる発音符号の試案作成など多岐にわたる足跡を残した。小川尚義は「先生の国語による教育とは単に文字どおりの国語に止まらない」と言った<sup>(4)</sup>。一九一八年（大正七年）七月二二日に明石元二郎は第七代台湾総督として着任した直後、「元来内地人と台湾古来民族とを集め、夫れを統轄するは実は困難のことであると思ふ。此は独り台湾のみではない。新領土並に植民地は総べて然らざるはない。然るに困難は勿論困難であるに違ひなきも、元来新領土に臨む精神は、夫れをして聊も内地と異ならぬ様に造り上る目的に外ならぬのである」と語った<sup>(5)</sup>。一九一九年一月に、台湾総督府は勅令代号をもって、台湾教

育令を制定した。これ以後、公学校の増設が年々行われ、そこに入学して初等教育を受ける台湾人児童数が急増していた。一九一八年の公学校就学児童数は十万七六九五五人であったものが教育令の制定された年には十二万五二三五人となり、一九二三年に二十万人を超え、一九三〇年に二十五万人に近づき、一九三三年に三十万人に達した。

台湾占領当初、清朝以来の伝統をひく読書人に対して、割合に寛大であり、一面では育成奨励などの策にでながら、五四以来の新文学運動の影響によっておこされた台湾の白話文運動にたいしては、当局は徹底的に取締った。七・七事変発生後の弾圧は特にきびしく、皇民化運動の名のもとに、中国文の使用および中国劇の上演を禁止し、寺廟を廃止し、信仰をおさえ、公学校での台湾語の使用を取り締まり、各地の警察機関に命じて、漢文の私塾まで閉鎖してしまつた。昭和十二年以後、文学に関して言えば、中国語で作品を発表することは絶対に不可能であり、もし文学作品を公にするとなると、どうしても日本語でしないわけにはゆかなかつた。総督府から出された台湾前島の新聞の「漢文欄」廃止令、中国語による刊行物の不許可などといった事態が発生した。「日本語を知つていて故意に台湾語を使う場合の台湾人は処罰の対象とされ、全家族国語を話す家は「国語の家」という「名誉」の門札がかげられた。」全家族が日本語を常用しかつ皇民的生活を送つている家庭を「国語常用家庭」として認定し、子弟の中等学校入学許可の考慮などいろいろの便利を与えたのはその最たる

ものと言えよう。日本延長主義による同化政策は、いつそう強化された。一九四一年の「皇民奉公会」の組織につながり、本島人の衣服、飲食、住宅、言語、姓名、宗教など生活様式一切を日本化してしまおうとする極端な方向に進められていくのであつた。「強要された異民族の言語」日本語でしか、自身の思想を表現できなくなつた。」

それに対して、頼和は対抗の姿勢を示した。彼は一生、中文でしか書かなかつた。それが原因で一九四一年十二月に彼は理由も示さないまま警察に逮捕された。

### 三、『秤』における台湾農民と警察政治

「秤」という小説は、一九二六年二月一日と二二日に、『台湾民報』第九二、九三号に発表された。この小説の最後に「一九二五年十二月四日夜」という文章が書き記されているため、一九二五年の歳暮に、すなわち台湾が日本に割譲されて三十年目の頃に完成したと推察することができるであらう。

この小説は主に、一九二五年前後の台湾社会を反映するものであり、小説の内容と関連して、その背景をなす台湾の政治経済の要素を二つ挙げる事ができる。すなわち、農民の悲惨な現状と日本警察の暴行である。

小説の主人公一奏得参一が生まれる時、彼の父親はすでに何も残さず世を去つていた。彼は小作人として何敵かの田畑を借りて

耕作を続け、何とか生計を維持することができはすである。が、一六歳であった。「この頃には田畑の契約が難しくなっていた。」それは業主が自分の利益のため、土地を製糖会社に渡したからである。秦得参の生涯は、このような暗黒な状況の中で始まったのである。

この小説においては、秦得参が裁判官に「間もなく三十歳になる」と答えている文章から、さらに小説が完成した一九二五年から推算してみれば、業主が秦得参一家と田畑の契約を破棄したのは、台湾が日本に割譲された一八九五年前後のことであった。会社の雇用労働者として働くか、家に時に取りつける仕事にでかけるか、という選択が迫ってきた。「この頃」は、台湾の農民が新しい状況にぶつかった一九一一年の時であった、とも推察することができる。

その時代、台湾の農民がどのように日本帝国の製糖業の衝撃を受けたかに関しては、経済学の研究者がより詳しくその情報を提供していた。一九〇〇年に台南県橋仔頭で設立された日本の台湾製糖株式会社は、台湾最初の新しい機械製糖工場を作っていた。臨時台湾製糖局の製糖の収入は、創立した一九〇二年度が二千五百万キロであった。が、一九一〇年度に九倍ほどの二億二千五百万キロに激増した。製糖業のすさまじい拡張は、田畑を耕作する農民の生存空間を圧縮するに違いない。

このような厳しい状況の中で、田畑の契約ができなかった農民は、製糖会社の雇用労働者となるしかないと追い込まれていた。

秦得参の母親はこの仕事で「牛馬も同然で」、それが嫌であったのである。秦得参はしかたなく、地主と契約をした業主の田畑で耕作することしかできなかった。勿論、業主よりさらに低い階級に属すると言わざるを得ない。このような「階級」の属性は、三十歳の彼が野菜売りとして一步一步滅亡の運命へと辿りつくたねであった。

一九二五年は「蔗農運動」がもつとも起こった時であった。製糖会社は秦得参のような農民を窮地に追い詰めるのみでなく、一方的に会社に付属される蔗農を搾取していた。蔗農は多く、強制的にキビを植えさせられ、キビの価格には何の決定権も持たず、完全に製糖会社に支配されていた。矢内原忠雄氏は『帝國主義下の台湾』の中で、「原料採取区域制度」や「甘蔗買収価格」の会社側の一方的な決定などによつて「蔗農は会社と特別の従属関係」に立たされていたと指摘している。そのため、一九二五年に「二林蔗農事件」が起つたのである。

もう一つの重要な政治要素は、すなわち日本警察である。植民地時代の台湾において、典型な警察政治が敷かれた。総督府の警察局、州庁の警察部、郡市警察課、街庄の警察分室、派出所または駐在所、というふうに、厳密な組織と統制のある警察網は、州庁、市役所や街庄役場の設置にさきだつて各村落にくまなくゆきわたつた。全台湾には警察機関を千五百カ所設置し、警察は一万八千人に達する。百六十人に一人の警察がいる計算なる。警察は保安、犯人の捜査にあたるばかりでなく、戸籍までにぎつて、

言論の規制、文教の監視、納税の督促、兵役の割当、日本人への土地売渡し強制、株式応募や郵便貯金の勧誘、末期には改姓名や信仰の改宗まで強制した。警察官は土皇帝として、実際に台湾民衆の生殺与奪を握る暴君となったのである。

警察の補助手段として、一八九八年に、台湾総督府は保甲制度を制定実施した。保甲制度とは、台湾人をして、自らの経費と役務の負担で、さらに連座制という責任まで負わせしめ、相互の監視、密告、摘発の義務を果たさせた地域的な民衆組織である。支配者は台湾民衆の一挙手一投足をも細大洩らさず把握するため、台湾人をして自らの縄で自らを縛りつける、この保甲制度を十分に活用したのである。十戸を一甲にして、十甲を一保にする。甲長と保長を設置して、住民の言語と行動を監視する。しかし、台湾人民は絶えず植民地統治に反対する運動を起こす。一九一九年から、台湾の民族独立運動を防止するため、台湾総督は台湾に対する統治政策を変更し、「武治」を「文治」に代えた。総督府は思想文化同化政策を励行する。台湾領有の初期に起こった激しい武力による血なまぐさい抵抗は、次第に抑えられ、抵抗は知識人による言論、あるいは文化、政治闘争に姿を変えて行った。植民地の警察が果たした役割は、その植民地の経済政策の実施と緊密に関係している。台湾のような政治と経済との結合の深さ、また広さは、世界植民地の歴史には極めて稀である。この世界の未曾有の強大な警察国家体制は、日本の敗戦まで続いていたのである。台湾の蔗農運動を鎮圧したこと、さらに台湾青年を戦場へ

送ったこと、警察はすなわち、このような植民地の暴虐なる政治経済政策を強制的に実施する暴力的な工具であった。「秤」において、頼和は自由に筆を駆使し、経済学の報告書に抽象化された警察の像を生き生きと再現している。

#### 四、主人公の悲劇

「秤」は、秦得参の生涯、とくにその人生の最後の日を描いている。すでに話したように、頼和の描いた「秦得参」という小人物の三十年が、ちょうど一九二五年という時点で、日本に割譲された台湾の三十年を意味し、秦得参の運命は一つの典型として、まさに台湾人の運命を示しているように思われる。

秦得参の最後の日は、この小説の高潮をなしている。この日は同時に、この一年の最後の日―大晦日―である。漢民族にとつての、この日の特徴は、「家族そろって炉を囲み、一家団らん」<sup>(1)</sup>を楽しむことである。が、秦得参の一家が壊されたのは、「大晦」のこの日であった。それは、日本植民地政府を代表する日本警察によって壊されたのである。したがって、この小説は階級の矛盾を表現するのみでなく、漢民族の人間と大和民族との矛盾をも表している。大晦日という時間の設定は、秦得参という小人物の物語の悲劇的な効果をいっそう強調するように思われる。

主人公の秦得参は、「勤勉で貧しさによく耐え、平和を愛する従順な」台湾農民の代表であると言えるであろう。彼は九歳の時、

牛の世話や長期契約の雇われ仕事をやり始め、一六歳の時から、家で臨時の仕事をやり、儉約の暮らしを送っていた。ところが、母親が逝去し、二人の子供が誕生したため、秦得参は妻との共働きが出来なくなり、さらに長期の過労で病気にかかり、仕事をほとんど見つけられないという窮地に追い込まれたのである。しかたなく、妻が実家からもらった金製の飾り花を質に入れ、隣家からより新しい秤を借り、野菜売りの商いを始めた。年末の商売がますますよくなり、彼も良き年を迎える「夢」を見たのに、「補大人」の警察に取り締まられ、秤が折られ、さらに拘禁され、罰金の処罰を受けた。

秦得参という人物は、「実直」と「硬直」という二つの性格を持つている。物語の展開に従い、彼の性格は「実直」から「硬直」へと変わっていったとも言えるであろう。実直であった彼は、親切な態度であった警察の「ただでもらう」といううわさを知らなかった。最初に、彼の秤が警察に折られて投げ捨てられたが、「それじゃお役人なら勝手に百姓をいじめてもいいのですか」という「気骨がある」話を裏でした。後に「なぜすぐ人を罵るのですか」という警察との直接に対抗する態度を取った。が、無実のまま三日拘禁の処罰を受けた彼は、妻が金の花飾りの質の値段にあたる三円を払ったため釈放された。この一連の侮辱のため、彼はますます「硬直」の態度を取っていった。最初、彼は「じゃ、タダであげなくちゃいけないと言っても言うのですか?」「それじゃお役人なら好き勝手に百姓をいじめてもいいのですか?」と文句を言

っていた。それから、「補大人」に「なぜすぐ人を罵るのですか?」と不満をいった。最後に「人間とは似てもつかない人間、畜生に誰がなりたがるものか、いったい世の中どうなっているんだ?生きているより死んだ方がどれだけ楽だかわかりやしない」という憤慨を洩らしつつ、「死」の覚悟を決めた。

小説の最後に、秦得参の運命的な悲劇を次のように言っている。

元旦、得参の家で突然騒がしい声が湧き起こって、叫び声や悲鳴や泣き声がいつしよくたになった。その後こう言っているのが聞こえた。

「何も見つかからないのか?」

「あるのは銀紙だけで、他に何も無い」

同じ頃、街では夜間巡邏中の警官が一人路上で殺されたという噂が広まっていた。

秦得参の覚悟とは、警察を殺して自滅の道を選ぶということである。このような「死」の抵抗は、まさに魯迅の言った「沈黙の中で爆発せよ」というようなことであろう。

「この悲劇を目のあたりにしてから随分経ったが、書こうと思つて記憶をたどっている中に、悲しみで胸がいっぱいになり書くことができなかつた」と頼和が言つて、主人公秦得参の悲惨な運命に深い同情を表した。また、頼和は「こんなことが発生するのは未開の国とは限らず、およそ権力が横行する所では起こるもの

だと感じた」と書いている。が、この「未開の国」、「権力の横行する所」といった文章から、日本の植民地である台湾の人々の直接口にできない反抗意識は読み取れる。それゆえに、秦得参という小人物の悲劇は同時に、作者が文学者として自ら感じた「悲劇」でもあろう。

## 五、悲劇における「喜劇性」

秦得参を悲劇的に描こうとする作者の意図は、小説のはじめからすでに顕著で、特に秦得参を紹介した文字に悲劇的描写が多い。たとえば「中でも秦得参一家は貧困者の最たるもので、父親は彼が生まれる時にはとくに世を去っていた。存命中は小作人として何畝（一畝は約二千平方メートル——訳者）かの田畑を耕していたが、死後残ったのは哀れな妻子だけである。もし業主が気の毒に思つて田畑を耕作させたら、人を雇つて耕作を続け、何とか生計を維持することもできた（地主に地代を払つて田畑を借り、小作人に耕作させる者を業主という——訳者）。だが、自己の利益を他人に分かち与える金持ちがいるだろうか、そんな事をしていたら金持ちにはなれなかつただろう。だから業主は、幾らかでも余計に小作米を納めてくれる人がいれば、そちらに小作させることになる。父親が在世中、血のにじむ思いで稼いだ僅かな金も、一緒にあの世に行つてしまったので、母と子二人の生活は、今や絶望的でさえある。」という叙述は、明らかにした。

「秤」において、作者は喜劇的手段を通じて悲劇的效果を生み出した。こうした状況を読者に紹介したのは、もちろん「局外の語り手」である。しかしそういう状況を選んでテクストに導入したのは、作者であつた。ここではユーモア小説によく使われる「混成的構文」について触れたいと思う。バフチンは混成的構文をこう定義する<sup>12)</sup>。

それはその文法的な（シンタクス上の）、また構成上の特徴によつて判断するならば一人の話者に属するが、そこには實際には二つの言表、二つの言葉遣い、二つの文体、二つの（言語）<sup>13)</sup>、意味と価値評価の二つの視野が混ぜ合わされているような言表である。

小説の最後に「この悲劇を目のあたりにしてから随分経つたが、書こうと思つて記憶をたどっている中に、悲しみて胸がいっぱいになり書くことができなかった。最近アナートル・フランスの『クレンゲビー』(L'Affaire Crainquahle ——訳者)を読んで、こんなことが発生するのは未開の国とは限らず、およそ権力が横行する所では起こるものだと感じた。ここで拙劣な文章をも顧みず、ここに綴つて諸家の批判を仰ぐことにした」と述べている。これは「局外の語り手」の説明的コメントである。この「局外の語り手」の発言を背後から操作しているのは誰か。もちろん作家、つまり頼和以外にはない。実際は頼和は、この悲劇の目撃者で、この悲



劇を読者に説明しているのである。

では、「秤」のテクストの該当箇所を引用してみよう。商売する前に、得参の妻が急いで出て行つて隣から一本の新しい秤を借りた。

というのは巡邏の警官は、専ら百姓たちの些細な事柄に目をつけては自分の成績にし、犯罪の摘発が多ければ多い程昇進も早いからである。そういう訳で何でもないことがしばしば問題になり、濡れ衣を着せられて訴えようにも訴えられない人が、今まで絶えなかつた。やれ通行取締り、道路規則、飲食物規則や旅行規約から度量衡規定に至るまで、およそ日常の一挙一動といえども法の干渉を受け、取締りの対象にならないものはない。

以上の「局外の語り手」の言葉は作者が得参の妻を通じて伝達したのである。この挿話も「悲劇の兆」という読者への示唆として挿入されているといえる。ここまで読んで、小説は得参の悲劇性を読者により明確に認識させる機能を持っている。先述のように、頼和が小説を悲劇にするのは明らかであるが、しかし、表現技法からみれば、彼はよく喜劇的手段を利用して、悲劇的效果に達している。次の場面をみよう。

この日の昼近く、下っ端のある巡邏警官が彼の売り場まで来

て、野菜に目が止まると、親切な態度で彼に話しかけた。

「大人、何か入用のものでもありませんか？」

「お前の野菜は割と新鮮だね。」

「ハイ、都会の方は田舎の人に比べて好みが贅沢なので、良い物でないと言ひ合せんで。」

「花キャベツは幾らかね？」

「大人がお買いになるのでしたら値段は幾らでもようございませぬ。私の品物をお買い上げくださるだけでもありがたい幸せ……。」と言つと、得参は見映えのいい物を幾つか選んで、藁を通して恭々しく差し出した。

「いや、秤ってみろ。」と警官が言つて何度か押し返したので、実直者の得参は秤にかけた。

(中略)

「秤が悪いんじゃないか？二斤なら二斤でいいのになぜ割引く？」と気色を変えて警官が言つた。

「どんでもないことで、まだ新しい秤です。」得参は落ち着き払つた様子で答えた。

「それをかせ！」

警官は明らかに不気嫌である。

ここにある文章は、基本的には泰得参と警察の内面を反映している。だが、途中で別な価値評価をもつ言葉、つまり嚴肅な言葉が混じりこんでいることがわかる。この文脈の中では、皮肉な色

合いをもっている。そのために警察の行為は一変して滑稽になる。つまりパロディー化である。秦得参が警察の真の目的をなかなか理解できないことは、対話で繰り返して示唆されていた。特に秦得参自身はあくまでも真面目であり、それが逆に可笑しさをますます組みとなつてゐる。なぜなら、秦得参が警察の真の目的をなかなか理解できないことこそ、秦得参の誠実さと警察のするさの表明だからである。また、相関的に悲劇小説における喜劇性が増すわけで、これこそが作者の意図なのである。そこに生まれる効果は、風刺的な皮肉的な効果である。

また、頼和は「諷刺的」な笑いを生み出すために、比較的な方法を使つてゐた。秦得参の物知らずと反対に、現場の一人の年配者は警察の意図を示唆した。

「君もバカだね。市場で商いをしている者が、こんな決まりさえも知らないのか？ どうやって商売をするつもりだね？ 何斤何両です、なんて答えていたが、本当にあの男の金を受けるつもりだったのかい？」

「じゃ、タダであげなくちゃいけないとでも言うのですか？」  
「とにかく君にはまだあの男の恐ろしさが分かつていない。まだあの男にぶちのめされたことがないからな。」

ここで、年配者の話は、一見秦得参とは無関係のようだが、秦得参の馬鹿さを浮き彫りにしている。また、現場の人の話は警察

を「諷刺」していることが、一層判然としてこよう。一例だけでは、頼和が意識してパロディー化したとは判断できないため、もう一例をあげよう。

「お前が秦得参か？」と裁判官が訊いた。

「ハイ、私です。」

「お前は罪を犯したことがあるか？」

「まもなく三十歳になりますが、一度も法を犯したことはありません。」

「以前はどうでもよい。こんど度量衡規定に違反した。」

「いいえ、それは無実です。」

「何？ そんなことはしてはいないと言うのか？」

「全く無実です。」

「だが巡邏警官の言うことに嘘はあるまい。」

「いいえ、そんなことはしていません。」

「違反した以上、処罰しないわけにはいかない。特別の計らいで罰金三円に処する。」

「けれどもお金がありません。」

「金がなければ三日間の禁錮を以て代える。それでもないと言うのか？」

「ハイ、ありません。」

裁判官は秦得参の事実陳述を聞かず、めちやくちやにな判決を

下す。これは頼和が風刺の技法によつて描くことで、小説に植民地時期の裁判制度への批判を織り込んだと読める。

## 六、「秤」の構造

小説「秤」の始めに、街の南にある威麗村の住民の状況が説明されている。歴史や伝統に深く根ざしている「土」の意識のため、ほとんど「勤勉で貧しさに耐え、平和を愛する従順な農民」であった。ところが、勤勉忍耐という精神構造は、土地の喪失とともに、無用なものとなり、平和従順という人間性格は後に、自滅反抗と結びつく。農民と土地、平民と警察の間にある矛盾が、このような淡々とした筆の元で展開し始めたのである。

ところが、もつとも基本的、現実的な問題は、「ほとんどが貧しく苦しい生活を送っている」ということである。「官公庁の請負い業をやる有力者」、「下級官吏」をしている台湾の住民、また、日本人警察、台湾総督府があり、すなわち、台湾という特殊地域の錯綜複雑な社会は、ピラミット式の階級構造として現れている。貧富の格差がますます拡大するのみでなく、有力者の極少数と貧困者の大多数とは、大きく対立している。頼和は小説の始めに、この短い文章で、このような台湾社会の現状を表している。

秦得参の父親は何も残さず死んでいった。彼は幼少から成年までいっばい苦労していた。が、「絶望的」な一家がようやく、より少し安易な生活を送り始めたのに、母親もあの世へ行き、家事

や子供の世話をするため、妻と共働きに出ることができなくなつた。秦得参がマラリアを治すため、多くのお金を出した。が、家族はいっそう苦境に陥ってしまった。

年の瀬も迫つてから、得参はやつと軽い仕事ができるようになったが、尾衛（旧曆十二月二十六日に商家農家が行う祭祀——訳者）も近づいたというのに、これという仕事が見つからない。このまま新年を迎えることになったら、仕事納めで仕事が見つかるチャンスが有ろうはずもなく、正月半月分食べ物を準備しなければならぬ得参は、格別このことに慌て悩み抜いた。

最後になつて彼は、街で野菜がよく売れると聞いた。その商いをやりたかつたが元手がなく、実直者の彼は人から借りる勇氣もなかつたので、仕方なく妻に実家にひと走りしてもらつた。水呑み百姓の妻に裕福な実家などあるわけがなく、多くの援助が望めないのは最初から分かりきつたことだが、彼女に良くしてくれる兄嫁が唯一の装飾品である金製の飾り花を彼女に渡して、これを貸してあげるから質にいれていらつしやい、何円かにはなるだろうから、それを元手にすればいいでしょう、といつてくれた。彼女としては質に入れるのは多少の危険も伴うが、さりとて別に方法もないので、そうせざるをえない。

商売をする前に、得参は隣家からわりと新しい秤を借りた。「秤は政府の専売品だから買うとなつて決して安いものでない」し、「道路規則、飲食物規則や旅行規約から度量衡規定に至るまで」、台湾人の日常の一挙一動も法の干渉を受けている。このような

「法」を実施する警察は、まさに人間としての「秤」である。秦得参が隣人から借りた「秤」は、どうしても警察という「秤」に對抗し得ないということは、すでに運命的に決まっている。

秦得参は野菜売りの商いを始めてから、「ますます良くなる」。彼は最初に正行に掛けている観音様の絵や門聯を取り換えようと考え、金紙、銀紙、蠟燭、線香などをも買おうとする。後に「年越し餅を造ろうと考えて砂糖と餅米」を買ひ、事件直前の日に、彼はまた「花模様の柄の布」を買つて帰つた。頼和が尾衙から大晦日までの半月を設定するということから、漢民族の習俗（一家団らんの大晦日）を再現し、物語の悲劇的効果をいっそう深化するという深い意味が読み取れる。

真の「秤」の巡邏警官がいよいよ登場した。「土」意識に培われた秦得参の「秤」に抵抗された巡邏警官は、「ただでもらう」ことができなく、「秤が悪いんじゃないか」という理由で、秦得参の秤を折つて投げ捨て、彼の住所名前をもひかえ、野菜売りの商いを取り締まった。以下の描写をみよう。

警官は得参の秤をおり、胸のポケットから手帳を取り出して、得参の住所姓名をひかえ、ブンブン怒りながら警察署に帰つていった。

「昼近く」に起こつたこの「暗黒」な出来事をきつかけに、秦得参の運命が一転した。一日休んで大晦日がやつてきた。「空はま

だすつかり明るくなつておらず」という文章から、あの日は妻の言つた「気にしない」だけでは終わるわけではないということが読み取れるであろう。

二度目に登場した警官は、「この野郎」、「コン畜生」という非文明的な言葉ばかりで秦得参を叱つている。役所に連行された秦得参は、度量衡規定に違反することを理由に、三日間の禁錮、後に罰金三円という処罰を無理に受けさせられた。

三円の罰金を納めた妻に、釈放された秦得参は、「殺されることはないから何も恐がることはないよ」と言つた。ところで、畜生でなく、人間として生きることに直面して、秦得参は恐がる「死」を選び、「夜間巡邏」の警官とともにあの世へ行つた。このような「死」の覚悟はまさに、植民地時代の台湾人の変えることができない運命ではないかと思われる。

#### 七、「秤」における警察

頼和は小さい時から、植民地政策の下の警察に反感を持つている。小学校を卒業した彼は、警察として出世するのを進められた。ところが、その時代においては、台湾の警察の多くは、社会の悪漢の出身であった。これらの人々は、法律の保護の下で、悪事を行うばかりであった。いわゆる「補大人」は、日本の植民地時代の台湾で、日本植民地政府が政治鎮圧をする象徴であると言えるであろう。

頼和は多くの文学作品で、「補大人」という特殊な階層の人間像をよく描いた。罪名を捏造し、詐欺強奪をするのは、「補大人」の本質的な特徴である。

警官は、専ら百姓たちの些細な事柄に目をつけては自分の成績にし、犯罪の摘発が多ければ多い程昇進も早いからである。そういう訳で何でもないことがしばしば問題になり、濡れ衣を着せられて訴えようにも訴えられない人が、今まで絶えなかつた。

頼和は文学創作を通じて、「補大人」の横暴をあばくのみでなく、その偽善的な「魂」の醜悪をも強く批判していた。

秤という日常生活によく見られるものが、「法律」という深い意味をもつのは、小説のテーマとなるゆえんである、ということには明らかである。秦得参の妻は秤の重要性を十分に知り、急いで隣人からより新しいものを借りてきた。この行動から、普通の人々は政府の専売品の秤がすなわち政府の「法」に当たるものであると感じても、それは彼らの生活、利益を保護するものでなく、「干渉」や「取り締まり」などを通じて、平民たちを支配するものであった。巡邏警官らはそれを利用して横行し、「自分の成績」にするのである。

結局、この秤は折られて、投げ捨てられた。それは「法」としての公正性を破壊するのみでなく、立法する日本の植民地政府を

代表する警官がそれを壊したので、立法者自身が法律を無視したというパラドックスをも意味しているのである。立法の目的は平民の利益を守るのではなく、執政者の統治を維持するためである。したがって、秤を壊すということは、執政者のいう「法」の皮相を剥ぎ、「不法」、「悪法」という実質を暴いた。

秦得参の妻は「気にしない方がいいわ」と言つて、主人を慰めていた。隣人から借りた秤は、何日かの収入で新しいものを買つて返せばよいとも考えていた。彼女たちの言う「秤」は、すでに「法」の象徴的な意味を超え、伝統社会におけるお互いに助け合うという道徳を元とする契約形式を表している。それは小説の中で「金の花飾り」と同じような機能を果していると考えられる。

頼和は秤や花飾りなどの象徴性を巧みに利用し、小説の表現力を豊かにした。とくに、物語が進んでいく内に、秤は重要な役割をはたしたとも言えるであろう。小説においては、巡邏警官は「親切な態度」で彼（秦得参）に話しかけた時、頼和は次のように警官の態度を生き生きと描いている。

「大人は遠慮深い方ですね、ハイ、一斤と十四両です。」

一旦秤にかければ買売になり、金の授受は行われ、タダでもらうのでなく、タダであげるのでもない。

「間違いないか？」と警官が訊く。

「ええ、間違いないでございます、二斤たつぷりありますが、大人がお買い上げになるものですから……」

「秤が悪いんじゃないか？二斤なら二斤でいいのになぜ割り引く？」と気色を変えて警官が言った。

「とんでもないことで、まだ新しい秤です」得参は落ち着き払った様子で答えた。

「それをかせ。」警官は明らかに不機嫌である。

「目盛りもまだはつきり見えます」わるびれる様子もなく、秤を渡しながら得参が言った。受け取った警官は、秤をおおよそ見るといった。

「これは使い物にならない代物だ。署まで持ってこい」

「どうしてですか？なおせばいいでしょう？」と得参が答える。

「行かないつもりか？」と警官が怒鳴った。

「行かない？この野郎」ポキツという音がして警官は折った秤を投げ捨てると、胸のポケットから手帳を取り出して得参の住所姓名をひかえ、ブンブン怒りながら警察署へ帰って行った。

秦得参の妻はもともと、「巡邏の警官は専ら百姓たちの些細な事柄に目をつけては自分の成績に」することを恐れていた。上の文章では、対話という形で、警官の気色、口調、態度などが詳しく表現されている。

秤が折られたということをきっかけに、売れ行きで新年を過ごすムードは一掃されてしまった。気にしなくて来年は運が向いてくるという夢を抱いた秦得参の一家は、大晦日に警官に連行され、

罰金を払わされたことによって、すべての幸せは奪われてしまった。頼和は直接警官の虚偽を描くほかに、被害者秦得参の反応から、警察の横暴な態度を表している。秦得参の殺人と自滅ということから、植民地支配の政府が台湾人に与えた傷害がいかに深かったかは明らかであると考えられよう。

## 八、終わりに

頼和の小説の中で、警察が主役として登場する作品は少ない。日本は台湾支配を軍隊で維持せねばならず、強大な警察網も日本台湾への統治の一つの柱である。「概していえば、五十一年の統治期間を通じて、台湾は台湾人社会と日本人社会とに截然と分かれていて、相互の接触は余りない。特に農村ともなれば、日本人をみることさえ稀な生活を営んでいた。唯一の例外が、どんな辺村僻地にも目が届くよう張りめぐらされた警察網である。そういう人々にとっては、日本政府すなわち警察であり、警察イコール日本人という図式も成り立つ。警察が圧政の象徴であり、実行者であるとの印象は、田舎に行けば行くほど実感を伴っていた。」

「秤」と同じように、「事を惹き起こして」、「不如意の過年」(不如意の新年)、「蛇先生」の三つの作品の中で、頼和はよく象徴的手法で、台湾の残酷な現実を反映し、台湾人の悲惨な生活や差別的な社会地位に深い同情を表していた。この三つの文学作品はそれぞれ内容と主題が違っても、植民地支配政策下の台湾人が

「法」と警察にぶつかり、対抗する中での悲惨な運命を描いた。

注

- (1) 下村作次郎『文学で読む台湾——支配者・言語・作家たち——』、田畑書店、一九九四年、六一—ページ。
- (2) 『頼和先生全集』台北明譚出版社、一九七九年、三三四—三三五ページ。
- (3) 陳逸雄編『台湾抗日小説選』、研文出版、一九八八年、二十一—ページ。
- (4) 国武種武『台湾における国語教育の展開』一九三二年、台北、十七ページ。小川尚義は一九九六年十二月に台湾に渡り、後に台北帝国大学の教授となった。言語学者。
- (5) 井出季和太『台湾治績志』一九三七年、台北、五九八ページ。
- (6) 台湾教育会『台湾教育沿革誌』一九三九年、台北、四〇八一—四〇九ページ。
- (7) 豊田国夫『言語政策の研究』一九六八年、東京、一五一—ページ。
- (8) 村上嘉英「旧殖民地台湾における言語政策の一考察」『天理大学学報』一九八五年三月、一四—四卷。
- (9) 尾崎秀樹「決戦下の台湾文学——植民地の文学——」『文学』昭和三十六年十二月—三十七年四月原載。岩波書店刊 『近代文学の傷痕』収、普通社刊。昭和三十八年二月。後、『旧殖民地文学の研究』収、剋草書房刊。一九七一年六月。同『台湾文学につ

いての覚書——台湾人作家の三つの作品——」（『日本文学』昭和三十六年十月原載。

(10) 岩波書店復刻、一九八八年。

(11) 引用は陳逸雄編訳『台湾抗日小説選』、研文出版、一九八八年。

(12) ミハイル・バフチン『小説の言葉』、新時代社 一九八七年四月、八十七ページ。

(13) 陳逸雄編『台湾抗日小説選』、研文出版、一九八八年、十六ページ。

(シヤ・ケンメイ 本学大学院博士後期課程)